

## 独思録：「税収不足」(11/22)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

先週、政府の行政刷新会議は、来年度の概算要求から無駄を洗い出す「事業仕分け」の前半5日間の作業を終え、総額1兆4000億円超を捻出しました。今週実施される後半の事業仕分けでは、更なる上積みを図り、過去最大の95兆円に膨れ上がった平成22年度当初予算の概算要求額を3兆円以上削減すると言っています。しかし、行政刷新相は衆院内閣委員会で、平成21年度の国の税収について「昨年10月からの景気の急降下で7兆～8兆円か、それよりも大きく落ち込む。」との見通しを示し、現在、約46兆円と見込む税収が38兆円以下になることを示唆しており、平成22年度の予算編成に暗雲が立ち込めています。

林芙美子のエッセイ「生活」の中に、税金の話があり、

「つい四、五日前、税務所のお役人が来た。お役人と云うと、胸がドキドキして、ちょうど昼食時(どき)だったけれども、御飯が咽喉(のど)へ通らなかった。私は、税金を払い始めてちょうど四年になるけれども、蔭では実際辛いなと思ったことがたびたびだった。収入が拾円の時が三、四度あったり、ちょっと旅をすると、その収入が止ったりするのに、税金は私にとって案外立派すぎた。今度も、税金の値上げだったけれども、「年収四千元はありますでしょう」と云われたのは誰のことかと吃驚(びっくり)してしまった。よく運んで二百円、悪くいって九拾円、平均百五拾円あったら、ナムアミダブツと月の瀬を越すことが出来る。」

と、税金を払うのに四苦八苦していた行があります。

林芙美子は、税務所のお役人に、

「吉屋信子(よしやのぶこ)さんの税金は下手な実業家以上です。」

と云われ、吃驚しているきりで何とも話しようがなかったと述べています。

当時、林芙美子は、朝日新聞に新聞小説を掲載しており、税務所から、さぞ沢山の原稿料を稼いでいるであろうと目に付けられていたのではないのでしょうか。

「どうぞ雑誌社や新聞社で、私が稿料をいったいいくら貰っているかきいてみて下さい。」「あなたは文学はお好きでいらっしゃいますか」

と林芙美子が尋ねると、お役人は、

「学生の頃はそれでもちょいちょい読みましたが、いまは法律をやっています。」

と答えた上で、

「その純文学の方は誰が一番収入があるのでしょうか。」

と逆に問いかけ、林芙美子は、

「たいいてい名前は派手でも、私と似たりよったりでしょう。」

と虚勢を張っています。

実際は、原稿料は十年前から一度も値上げにならず、原稿料に無頓着な林芙美子は、割

合と平気でいたようですが、税金も、吉屋さん位になりたいとの願望はあったようです。

また、これは生れかわって来ないことには、到底駄目なことだろうとも断念していたようです。

しかし、

「だって朝日新聞にお書きになったでしょう。」

という役人の言葉には、ムカツイタようで、女学校へ行っている姪の顔を見ても腹がたつて、

「税金が増えるのよ、怖くないか？」

と姪に当り、怖いと同情してくれたと述べています。

「いったい、税金って何に使うか知ってる？」

と十五歳の姪に尋ねると、

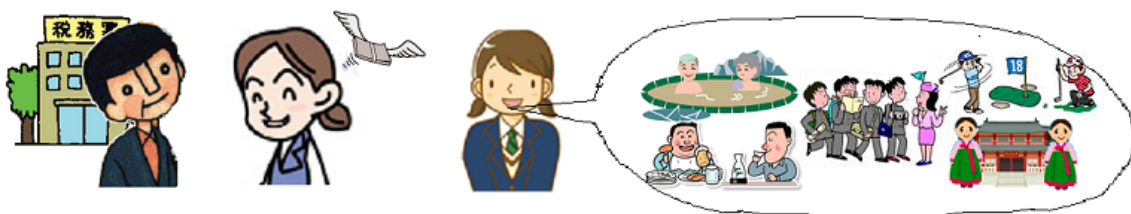
「ほら、大名旅行ってあるじゃない、あんなのじゃないの。」

と答えられ、

「そうかなア。」

と思ったようです。

今回の事業仕分けの公開で、「ほら、大名旅行ってあるじゃない、あんなのじゃないの。」という税金の使われ方が、幾分かは、分ってきましたが、その一方で、税金を取り易い、「私は、税金を払い始めてちょうど四年になるけれども、蔭では実際辛いなと思ったことがたびたびだった。収入が拾円の時が三、四度あったり、ちょっと旅をすると、その収入が止ったりするのに、税金は私にとって案外立派すぎた。」という人々からも、税収不足を補うための増税も考えているようで、「税金が増えるのよ、怖くないか？」との国民の声も聞こえて来そうです。



#### 毎日：「事業仕分け：前半の作業終える... 1.4兆円を捻出」(11/17)

政府の行政刷新会議は17日、来年度の概算要求から無駄を洗い出す「事業仕分け」の前半5日間の作業を終えた。事業の「廃止」や「予算計上見送り」による予算の削減のほか、公益法人などの基金の国庫返納などを求め、総額1兆4000億円超を捻出（ねんしゅつ）した。24～27日に後半の事業仕分けを実施し、更なる上積みを図る。【平地修、寺田剛】

5日目の17日の仕分け作業では、地域のNPO（非営利組織）活動を支援する内閣府の「現場の出番創出モデル調査」など5事業計42億円について「廃止」と判定した。

また、独立行政法人・福祉医療機構については積み立てている基金2787億円の全額

を国に返還するよう求めた。

宇宙航空研究開発機構（JAXA）の中型ロケット計画も中止すべきだとして、58億円の「予算計上見送り」と判断した。

刷新会議が仕分けの対象とした447事業のうち、前半5日間で仕分けをしたのは243事業。毎日新聞の集計では、「廃止」と判断したのは計33事業879億円で、「予算計上の見送り」は12事業582億円。「予算縮減」のうち、削減幅を明記したものを含めると、削減額は計約4900億円となる。

また、国庫への返納を求めた公益法人や独立行政法人の21の基金や貸付金の合計は約9500億円で、削減額と合わせると1兆4000億円を超えた。

削減幅を明示していない「予算縮減」や、「地方や民間への事業移管」の判断が多数を占めて、「予算要求通り」と判断したのは、厚生労働省の「優良児童劇巡回事業」のみだった。

10年度当初予算の概算要求額は過去最大の95兆円に上り、政府は3兆円以上の削減を目指している。

仕分けの結果を年末の予算編成に向けた財務省の査定に反映させ、歳出の抑制を図る方針だ。

日経：「09年度税収、38兆円以下も 仙谷行刷新相が見通」（11/19）

仙谷由人行政刷新相は18日の衆院内閣委員会で、2009年度の国の税収について「昨年10月からの景気の急降下で7兆～8兆円か、それよりも大きく落ち込む」との見通しを示した。現在、約46兆円と見込む税収が38兆円以下になることを示唆した発言とみられる。

法人税収が急減しているため、44兆円と見込んでいた国債発行額が50兆円を超える可能性が出てきた。

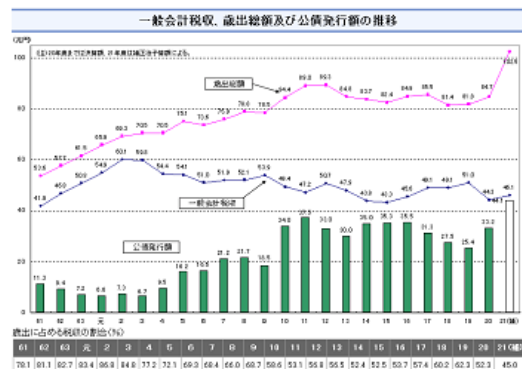
10年度の税収は09年度を参考に見積もるため、30兆円台にとどまる見通し。鳩山政権は10年度の国債発行額を44兆円以下に抑える方針だが目標達成は難しくなってきた。

財務省によると09年度上期（4～9月）の一般会計税収は10兆923億円で前年同期比で24.4%減った。法人税収は、企業業績の悪化で、企業が納めすぎた税金を払い戻す還付金が納付金を上回る還付超過（赤字）に陥った。

仕分け判断の主な理由と評決結果

理由	主な事業	結果
政府、自治体の他事業と重複	・高齢者職業相談室運営費(3億円)	廃止
	・国立青少年教育振興機構(104億円)	自治体などに移管
自治体主体で実施すべきだ	・下水道事業(5188億円)	自治体に移管
	・まちづくり関連事業(1821億円)	自治体などに移管
天下り関連	・両立支援レベルアップなど2助成金(40億円)	21世紀職業財団の活用中止
必要性、効果などが不明確	・次世代スーパーコンピューティング技術の推進(267億円)	見送りに限りなく近い予算縮減
用途の監視などが不十分、毎年度必要額を予算計上	・福祉医療機構の基金(2787億円)	全額を国庫返納
	・こども未来財団の基金(300億円)	全額を国庫返納

※カッコ内は10年度予算の概算要求や基金の残高



< 林芙美子 (1903-1951) >

本名フミ子、「花の命は短くて苦しきことのみ多かりき」の名句で知られる昭和初期の流行作家。

北九州市門司区生まれ。尾道市立高等女学校（現広島県立尾道東高等学校）卒業。



高女時代、学費を得るため夜は帆布工場で働き、夏は神戸に出稼ぎに行くなど、苦学をしながら文学の道を志すようになり、「秋沼陽子」名で『山陽日日新聞』や『備後時事新報』に投稿。

高女を卒業後、『放浪記』のモデルとなる岡野軍一を頼って上京。1928年から長谷川時雨主催の雑誌『女人芸術』に私小説『放浪記』を連載し、1930年に単行本として出版され当時のベストセラーとなった。戦時中は報道班員となり、中国や仏印に従軍。戦後も多くの小説・随筆を発表し、『晩菊』で女流文学者賞を受賞。

他に、『蒼馬を見たり』『風琴と魚の町』『清貧の書』『泣蟲小僧』『牡蠣』『稻妻』『うず潮』『浮雲』など。

### 春秋：「デフレ状況」(11/21)

あのころの華やぎはどこへ消えたのだろう。フランス産ワインの新酒「ボージョレ・ヌーボー」がすっかり高級感を失い、スーパーには格安品が山積みだ。フルボトルで 749 円と聞いて店頭をのぞいたら、さすがにこれは完売だった。

値下げ合戦が熱を帯びている。家電もパソコンも衣料品も外食も、果てしない消耗戦というべきか。880 円のジーンズが登場したとたん、こんどは別の量販店が 690 円で張り合っている。銀座のデパートでは高級ブランド店の撤退跡に、ファストフードならぬ低価格の「ファストファッション」が入るといふ。

モノが安いのは、まずは家計にとって嬉(うれ)しい話だ。しかしこれがまた景気悪化を招いて人々の財布のひもはますます固くなり、不況がさらにひどくなると思えば嬉しさも帳消しどころではない。きのう政府は日本経済がデフレ状況にあると宣言した。そう診断したなら一刻も早く、この厄介な病に効く薬が欲しい。

来春卒業する大学生の就職内定率は、かつての「氷河期」並みの落ち込みという。木枯らし吹く街で、足を棒にして会社を回る学生たちがあふれているのだ。いかに身近な品々が安くとも、明日への希望を持ってぬ世の中のなんという寒々しさだろう。ありがたい格安ボージョレにもじわりと募る、苦み渋みである。

#### <ボージョレ・ヌーボー>

ボージョレ (Beaujolais) は、フランス南東部・リヨンの北に位置する土地で、特にワインの産地として知られる。また、しばしばこの地のワインそのものを指す。

フランス革命以前、ボージョレは単独の州であった。現在は、行政上ローヌ=アルプ地域圏に属するが、ブルゴーニュ地域圏のマコネ (Mâconnais) 地区に隣接し、この地のワインはブルゴーニュ・ワインに分類される。

ボージョレという地名は、かつてのこの地方の中心地ボージョ (Beaujeu) に由来する。

毎年、ブドウの出来栄をチェックすることを主な目的とした特産品の新酒をボージョレ・ヌーボー (Beaujolais nouveau) といい、毎年 11 月第 3 木曜日に解禁される。



### 天声人語：「世界不況が招いた氷河期」(11/20)

バブル散っての就職氷河期は大量のフリーターを生んだ。その世代に属す作家の平野啓一郎さん(34)が、近刊の「朝日ジャーナル別冊」で京大時代の就職観に触れている。就職活動の友も、掲載のあてなく小説を書く自分も暗かったという。

「どこで働きたいか、せっぱ詰まっていたわりに全然思いつきませんでした。あんまり歓迎されないまま社会に出ることになった辛(つら)さは、同世代間にも歪(ひず)みを残したと思います。23歳で芥川賞を取るほどの異才は別として、安定職への道はますます険しい。

来春卒業予定の大学生の就職内定率(10月1日現在)は62.5%。去年の同じ時期より7.4ポイントも低く、最近の底だった03年の60.2%に近い。昨秋からの世界不況が招いた、再びの氷河期らしい。

昨今の就活は3年生の秋からもう本番だ。まずは大学による説明会、年が変わって会社訪問や面接、春には内定が出始める。本紙オピニオン面に登場した学生さんは「就活の開始から逆算して、大学生活が追い立てられる」とこぼしていた。

正規雇用の門が狭くなれば、就活はなお忙しい。100社200社と門をたたき、たとえ志望の業種や企業でなくてもまず内定を得る作戦となる。縁に恵まれず、後輩に交じって落葉のオフィス街を回るのは辛い。

前倒し、新卒での一発勝負という就職戦線は、学生にも採用側にも当たり外れが大きい。適齢をどんな経済状況で迎えるかは運頼みだし、適材は既卒にもいよう。互いに歪みを残さないよう、出会いの風景はもっとおおらかでありたい。

<平野啓一郎(1975-)>

小説家。京都大学法学部卒。愛知県蒲郡市で生まれ。『日蝕』により当時最年少の23歳で芥川賞を受賞。

「ロマンティック三部作」と呼ばれる過去の歴史を舞台にした長編『日蝕』『一月物語』『葬送』で注目を集めたが、現在は、一転して現代を舞台にした実験的な短編に取り組んでいる。

作品に、『一月物語』『高瀬川』『滴り落ちる時計たちの波紋』『顔のない裸体たち』『あなたが、いなかった、あなた』『決壊』『ドーン』など。



### 編集手帳：「磨り減ることのない詩」(11/21)

杉山平一さんの詩が好きで、小欄にも何度か引いた。たとえば『風鈴』。かすかな風に  
／風鈴が鳴つてゐる／目をつむると／神様 あなたが／汗した人のために／氷の浮かんだ  
コップの／匙(さじ)をうごかしてをられるのが／きこえます。

60年以上も前に編まれた詩集『夜学生』の一編だが、「格差」「貧困率」といった暗い  
言葉が飛び交う現代に働く人たちを、慰めるかのような、抱きとめるかのような優しい響  
きがある。

95歳を迎えた杉山さんの新著、『巡航船』(編集工房ノア)が出版された。詩集ではな  
く、自選の文集である。

花森安治や立原道造と結んだ青春期の交友、会社勤めの照り曇り、幼い長男を亡くした  
悲しみなどが綴(つづ)られている。杉山さんの詩を愛誦(あいしょう)する人は、作品  
の生まれてきた母胎に触れることができ、興味が尽きないだろう。

むかし帽子の上に光る徽章(きしょう)のやうな人間になりたいと思つてみた／いま  
自分は靴のうらに光る鉄鉾(てつびょう)のごとき存在にすぎない／人しれず 支へつゝ  
／磨(す)りへらんかな(『徽章』)。その詩は、屈託を抱えた人々の心を人知れず支えて、  
いまま磨り減ることはない。

#### <杉山平一(1914-)>

詩人、映画評論家。東京帝大卒。福島県出身。

在学中、三好達治にみとめられ、「四季」に参加、のち同人。卒業後、織  
田作之助らと「大阪文学」などを創刊。早くから映画評論も手がける。

昭和16年中原中也賞、18年「夜学生」で文芸汎論詩集賞。41年帝塚山  
学院短大教授。

著作に『映画芸術への招待』『映画の文体 - テクニックの伝承』『杉山平一詩集』『夜学生』  
『詩と生きるかたち』『青をめざして』など。



#### <花森安治(1911-1978)>

編集者、グラフィックデザイナー、ジャーナリスト。東京帝国大学文学  
部卒。兵庫県神戸市出身。生活雑誌『暮らしの手帖』を創刊。

卒業後は伊東胡蝶園(現在のパピリオ)宣伝部に入り、広告デザインに  
携わり、1930年代末期から手がけた化粧品広告には、手書き文字で顧客に  
語りかける個性的なスタイルを取り入れている。

太平洋戦争に応召するも病気により除隊し、終戦まで大政翼賛会の外郭団体に籍を置いて  
国策広告に携わる。

作品に『服飾の読本』『流行の手帖』『風俗時評』『暮らしの眼鏡』『一銭五厘の旗』など。



< 立原道造 (1914-1939) >

詩人、建築家。日本橋区橘町（現：東日本橋）に生まれ。東京帝国大学工学部卒。

在学中に建築の奨励賞である辰野賞を3度受賞。

卒業後、石本建築事務所に入所、「豊田氏山荘」などを設計。

詩作の方面では物語「鮎の歌」を『文藝』に掲載するほか、立て続けに詩集を出版、発表し建築と詩作の双方で才能を見せた。

昭和14年、第1回中原中也賞（現在の同名の賞とは異なる）を受賞。

その他に『優しき歌』『ゆふすげびとの歌』『萱草に寄す』『暁と夕の詩』など。



### 余禄：「市場の反応に無頓着」(11/17)

「破綻（はたん）とはほころびのことです」とぼけた答弁は、昭和改元間もない1927年3月、衆院でたずねられてもいない銀行の破綻に言及し、昭和金融恐慌を引き起こした片岡直温蔵相のものだ。銀行破綻の意味を分かっているのかと責任追及されて答えた。

「昭和史」は閣僚の失言から始まったといわれる。「今日正午ごろ渡辺銀行が破綻しました」。この片岡発言により当時まだ金策を続けていた銀行が取り付け騒ぎにあい実際に破綻した。蔵相は責任を否定したが、金融不安は燃え広がった。

ついに戦争の破局にいたった戦前昭和史の迷走の最初のつまずきが閣僚の失言だったことは、政治家が常に肝に銘ずべきだろう。そして経済閣僚の発言が、一瞬のうちに地球上のすみずみにまで影響力を及ぼす今日のグローバル経済である。

だから直嶋正行経済産業相が国内総生産速報の内容を発表前に明らかにしたことは“野党ぼけ”と言われても仕方ない。いうまでもなく政府の発表する経済指標は為替、債券、株式などの市場に大きな影響を与える。このため発表時間が厳重に管理されるのは当たり前話である。

速報値は予測の範囲でもあり、発言で混乱はなかった。だが円高容認と受け取られた財務相発言や、すわ金融モラトリアム（支払い猶予）かと思わせた金融担当相発言など、どうも市場の反応に無頓着な言葉が目立つ鳩山政権の経済閣僚だ。

いや、ことは経済閣僚ばかりでない。国民からその運命を託された者が自らの言葉の重さに鈍感であってはならぬのは首相ら全閣僚にいえる。政権交代が直ちに望ましい政治を保証するわけではないのも、戦前昭和史の教訓だ。

< 片岡直温 (1859-1934) >

実業家、政治家。高知県出身。

滋賀県警察部長を経て内務省に入省。その後、日本生命、都ホテルの社長を歴任、共同銀行、関西鉄道などでも活躍。

政界では、衆議院議員に当選、桂太郎の新党構想に關与して所属の立憲国民党の分裂を引き起こして桂新党（立憲同志会）に参加、後身の憲政会総務を務める。

第2次加藤高明内閣で商工大臣として初入閣、第1次若槻内閣の大蔵大臣で、1927年3月14日の衆議院予算委員会において、昭和金融恐慌の引き金となる「東京渡辺銀行がとうとう破綻を致しました」という失言をし、若槻内閣は総辞職に追い込まれた。

